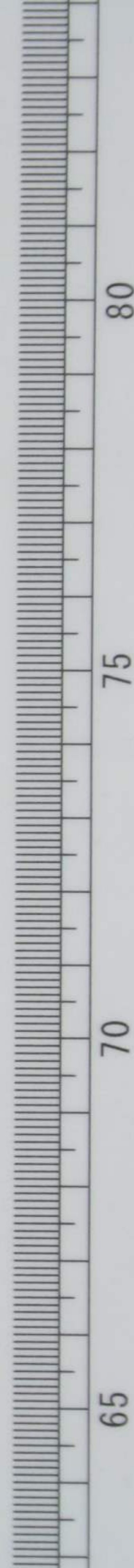


本
文
D



65

70

75

80



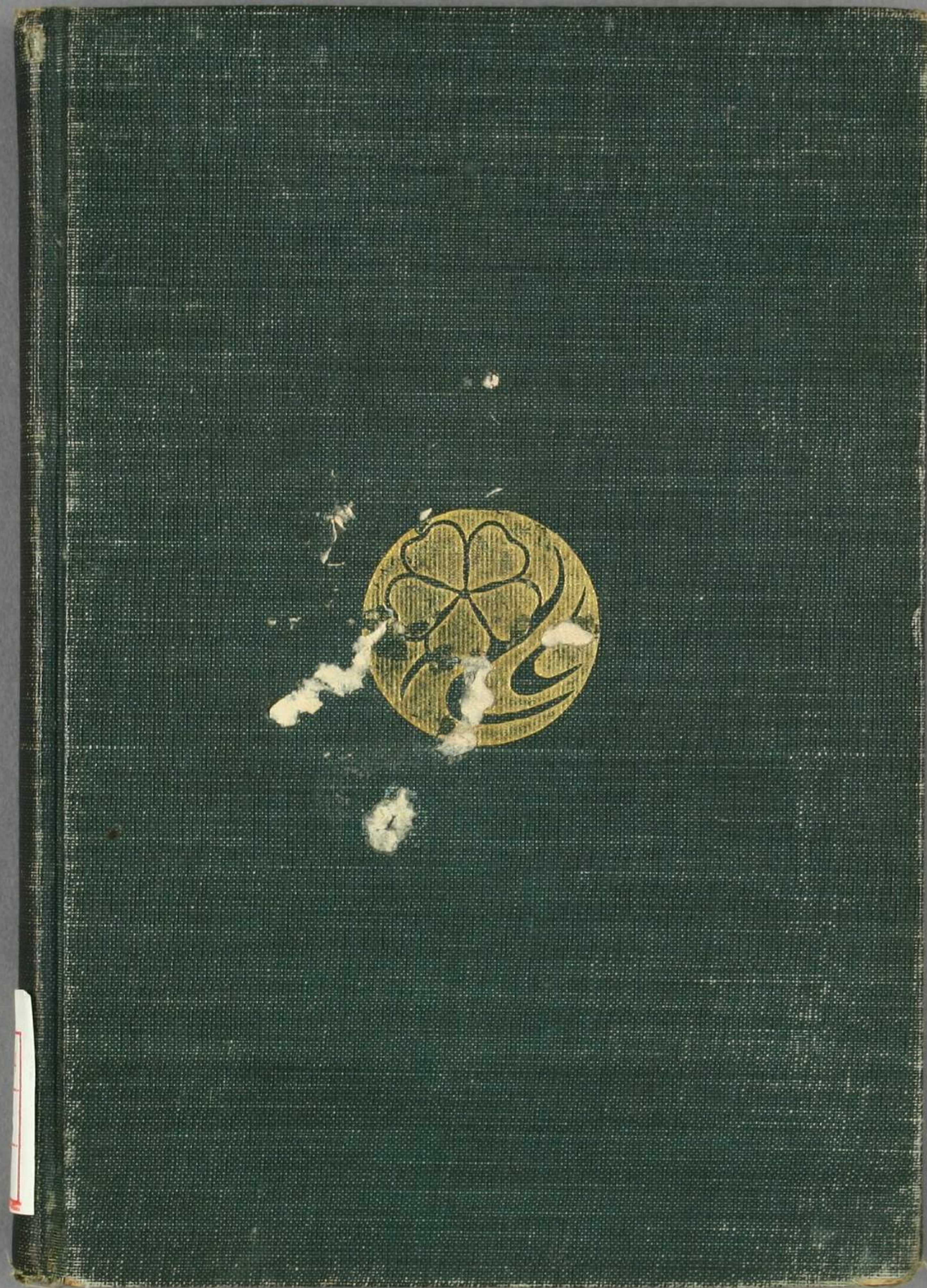
孔雀船

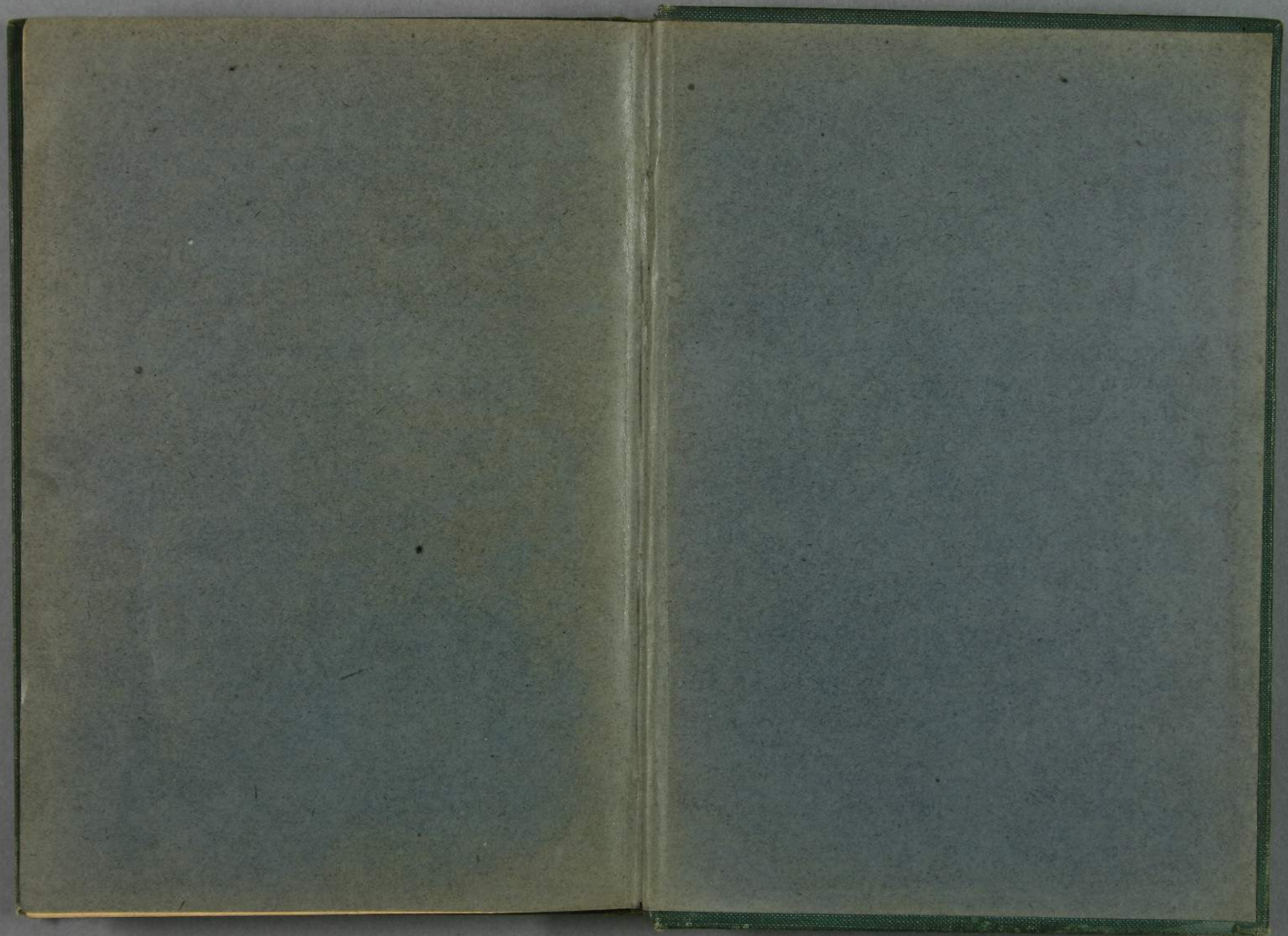
伊良子清白著

本間文庫

文庫 14

D 166







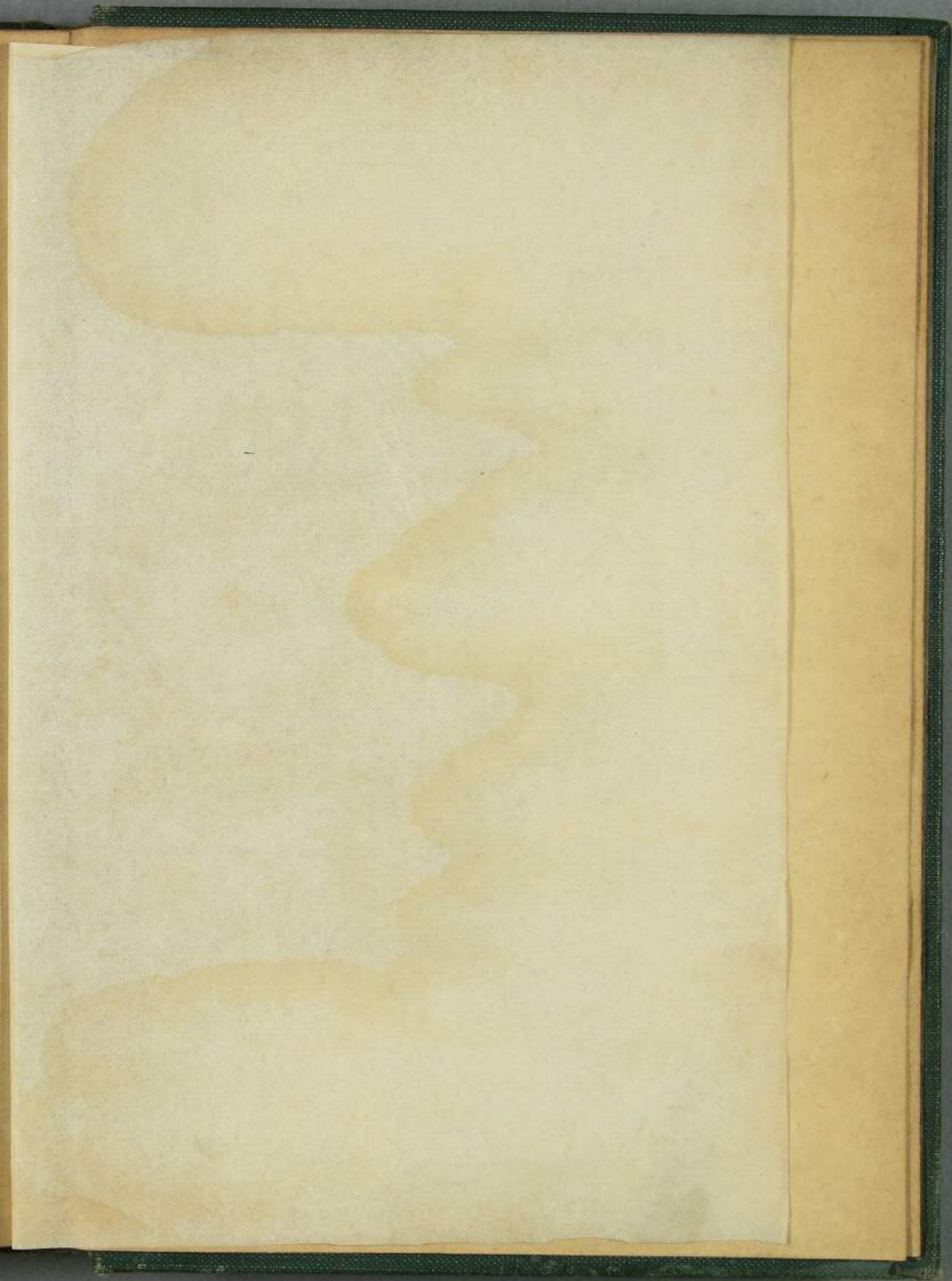
孔雀船

伊良子清白著

文庫14
D166

故郷の山に眠れる母の靈に





目次

漂泊	一
淡路にて	七
秋和の里	二
旅行く人に	二五
島	一六

海の聲……………三〇
夏日孔雀賦……………三二
花賣……………三三
月光日光……………三六
華燭賦……………三九
五月野……………四三
花柑子……………四三

不開の間……………三六
安乗の稚兒……………三九
鬼の語……………四〇
戯れに……………四二
初陣……………四三
駿馬間答……………四六
通計拾八篇

孔雀船

漂泊

荻戸むしろどに
秋風あきかぜ吹ふいて
河添かはまの
旅籠屋はたごさびし

伊良子清白著

哀^{あは}れなる旅^{たび}の男^{おとこ}は
夕暮^{ゆふぐれ}の空^{そら}を眺^{なが}めて
いと低^{ひく}く歌^{うた}ひはじめぬ

亡^{なき}母^{はは}は
處^{ところ}女^めと成^なりて
白^{しろ}き額^{ひか}月^{つき}に現^{あら}はれ

亡^{なき}父^{ちち}は
童^{わら}子^こと成^なりて
圓^{まる}き肩^{かた}銀^{ぎん}河^がを渡^{わた}る

柳^{やなぎ}洩^もる
夜^よの河^{がは}白^{しろ}く
河^{がは}越^こえて煙^{けぶり}の小^こ野^のに

かすかなる笛の音ありて
旅人の胸に觸れたり

故郷の
谷間の歌は
續きつゝ断えつゝ哀し
大空の返響の音と

地の底のうめきの聲と
交りて調は深し

旅人に
母はやどりぬ
若人に
父は降り

小野の笛煙の中に
かすかなる節は残り

旅人は

歌ひ續けぬ

嬰子の昔にかへり

微笑みて歌ひつゝあり

淡路にて

古翁しま國の
野にまじり覆盆子摘み
門に來て生鈴の
百層を驕りよぶ

白晶はくしょうの皿さらをうけ
 鮮あざらけき乳ちを灑そぐ
 六月くわつの飲いん食じきに
 けた、まし虹にじ走はしる
 清涼せいりやうの里さといで、
 松まつに行ゆき松まつに去さる

大海おほのすなどりは
 ちぎれたり繪ゑ卷まき物もの
 鳴門なるとの子海この幸さいち
 魚なの腹はらを胸むな肉じに
 おしあて、見みよ十人とたり
 同音どうおんにのぼり來くる

秋和の里

月に沈める白菊の
秋冷まじき影を見て
千曲少女のたましひの
ぬけかいてたるこゝちせる

佐久の平の片ほとり
あきわの里に霜やおく
酒うる家のさゞめきに
まじる夕の鴈の聲

蓼科山の彼方にぞ
年経るおろち棲むといへ

月はろくとうかびいで
八谷の奥も照らすかな

旅路はるけくさまよへば
破れし衣の寒けきに
こよひ朗らのそらにして
いとゞし心痛むかな

旅行く人に

雨の渡に

順禮の

姿寂びしき

夕間暮

霧の山路に

駕昇の

かけ聲高き

朝朗

旅は興ある

頭陀袋

重きを土産に

歸れ君

悪魔木暗に

ひそみつゝ

人の財を

ねらふとも

天女泉てんじよいづみに

下り立ちおたて

小瓶洗こびんあらふも

目めに入いらむ

山蛭やまひる膚はだに

吸すひ入いらば

谷たにに薬水やくすい

溢あふるべく

船醉海ふねまひうみに

苦くるしむも

龍神りゆうじん臟むねを

醫すべし

鳥の戸に

火は燃えて

山に地獄の

吹嘘聲

潮に異香

薫ずれば

海に微妙の

蜃氣樓

暮れて驛の

町に入り

旅籠の門を
くゞる時

米の玄きに

驚きて

里に都を
説く勿れ

女房語部

背すりて

村の歴史を
講ずべく

主膳夫

雉子きじを獲とて

旨うまいき羹あつもの

とゝのへむ

芭蕉ばせの草鞋わらじ

ふみしめて

圓位えんいの笠かさを

頂いたじげば

風俗ふうぞく君きみの

鹿島かしま立たち

翁おきなさびたる

可笑わかしさよ

島

黒潮くろしほの流ながれて奔はしる
沖中おきなに漂たぐよふ島しまは

眠ねぶりたる巨人きよじんならずや
頭かしらのみ波なみに出い出して

峨々ががとして岩い重かさなれば
目めや鼻はなや顔かほ何なにぞ奇きなる

裸々ららとして樹きを被からず
聳そびえたる頂いた高たかし

鳥啼くも魚群れ飛ぶも
雨降るも日の出入るも

青空も大海原も
春と夏秋と冬とも

眠りたる巨人は知らず

幾千年頑たり罅たり

海うみの聲こゑ

いさゝむら竹打戦たけうちぐ
丘おかの徑こうちの果はてにして
くねり可笑わしくつらくに
しげるいそべの磯いそ馴なれ松まつ

花はなも紅葉もみぢもなけれども
千鳥ちどりあそべるいさごちの
渚なみさきに近く下おり立たてば
沈しづみて青あをき海うみの石いし

貝かひや拾ひろはん莫な告のり藻そや
摘つまんといひしそのかみの

歌をうたひて眞玉なす
いさごのうへをあゆみけり

波と波とのかさなりて
砂と砂とのうちふれて
流れさゞらぐ聲きくに
いせをの蟹が耳馴れし

音としもこそおぼえざれ

社をよぎり寺をすぎ
鈴振り鳴らし鐘をつき
海の小琴にあはするに
澄みてかなしき簫となる

御座の灣西の方
和具の細門に船泛けて
布施田の里や青波の
潮を渡る蟹の兒等

われその船を泛べばや
われその水を渡らばや

しかず纜解き放ち
今日は和子が伴たらん

見ずやとも邊に越賀の松
見ずやへさきに青の峰
ゆたのたゆたのたゆたひに
潮の和みぞはかられぬ

和^{なご}みは潮^{しほ}のそれのみか
日^ひは麗^{うら}らかに志^し摩^まの國^{くに}
空^{そら}に黄^こ金^{がね}や集^{つど}ふらん
風^{かぜ}は長^{のど}閑^かに英^あ虞^この山^{やま}
花^{はな}や郡^{こほり}をよぎるらん

よしそれとても海^あ士^まの子^こが
歌^{うた}うたはずば詮^{せん}ぞなき
歌^{うた}ひてすぐる入^{いり}海^{うみ}の
さし出^での岩^{いは}もほゝるまん

言^{こと}葉^はすくなき入^{いり}海^{うみ}の
波^{なみ}こそ君^{きみ}の友^{とも}ならめ

大海原に男のこらは
あまの少女は江の水に

さても縑の衣ならで
船路間近き藻の被衣
女だてらに水底の
黄泉國にも通ふらむ

黄泉の醜女は嫉妬あり
阿古屋の貝を敷き列ね
顔美き子等を誘ひて
岩の櫃もつくるらん
さばれ海なる底ひには

父も沈みぬちゝのみの
母も伏しぬ柞葉の
生れ乍らに水潜る
歌のふしもやさとりらん

櫛も捨てたり砂濱に
簪も折りぬ岩角に

黒く沈める眼のうちに
映るは海の泥のみ

若きが膚も潮沫の
觸るゝに早く任せけむ
いは間にくつる捨錨
それだに里の懐しき

哀歌をあげぬ海なれば
花草船を流れすぎ
をとめの群も船の子が
袖にかくるゝ秋の夢

夢なればこそ千尋なす

海うみのそこひも見ゆるなれ
それその石いしの圓まるくくして
白しろきは星ほしの果はてならん

いまし蟹あまの子こ艦拍子びやうしの
など亂聲らんせいにきこゆるや
われ今海いまうみをうかがふに

とくなが顔は蒼みたり

ゆるさせたまへ都人

きみのまなこは朗らかに

いかなる海も射貫くらん

傳へきくらく此海に

男のかげのさすときは

かへらず消えず潜女の
深き業とぞ怖れたる

われ微笑にたへやらず

肩を叩いて童形の

神に翼を疑ひし

それもゆめとやいふべけん

島こそ浮べくろくと
 この入海の島なれば
 いつ羽衣の落ち沈み
 飛ばず翔らず成りぬらむ
 見れば紫日を帯びて

陽炎ひわたる玉のつや
 つやくわれはうけひかず
 あまりに軽き姿かな

白ら松原小貝濱
 泊つるや小舟船越の
 昔は汐も通ひけむ

これや月日の破壊ならじ

潮のひきたる煌砂

うみの子ならで誰かまた

かゝる汀に灰白き

鏡ありとや思ふべき

大海原と入海と

こゝに迫りて海神が

こゝろなぐさや手すさびや

陸を細めし鑿の業

今細雲の曳き渡し

紀路は遙けし三熊野や

白木綿咲ける海岸に
落つると見ゆる夕日かな

夏日孔雀賦

園の主あるじに導みちびかれ
庭にはの置おき石いし石いし燈籠とうろう
物もの古ふるる木こ立たち築山つきやまの
景けい有ある所ところうち過すぎて
池いけのほとりを來きて見みれば

棚につくれる藤の花
 紫深き彩雲の
 陰にかくるゝ鳥屋にして
 番の孔雀砂を踏み
 優なる姿睦つるゝよ
 地に曳く尾羽の重くして

歩はおそき雄の孔雀
 雌鳥を見れば嬌やかに
 柔和の性は具ふれど
 綾に包める毛衣に
 己れ眩き風情あり
 雌鳥雄鳥の立竝び

砂すなにいざよふ影かげと影かげ
飾かざり乏とほき身みを耻はちて
雌め鳥とりは少すこし退しりぞけり
落おち羽はは見みえず砂すなの上うへ
清きよく掃はきたる園その守もりが
箒はらの痕あとも失うせやらす
一いつ落おち散ちる藤ふぢ浪なみの

花はなを啄つばむ雄をの孔く雀じゃく
長ながき花はな總ぶさ地ちに垂たれて
歩あゆめば遠とほし砂いさ原はら
見みよ君きみ來きたれ雄をの孔く雀じゃく
尾な羽は擴ひろぐるよあなや今いま
あな擴ひろげたりことくく
こゝろ籠こめたる武ぶ士しの

晴の鎧に似たるかな

花の宴宮内の

櫻襲のごときかな

一つの尾羽をながむれば

右と左にたち別れ

みだれて靡く細羽の

金糸の縫を捌くかな

圓く張りたる尾の上に

圓くおかる、斑を見れば

雲の峯湧く夏の日に

炎は燃ゆる日輪の

半ば蝕する影の如

さても面は濃やかに

げに天鷲絨の軟かき

これや觸れても見まほしの
指に空しき心地せむ

いとゞ和毛のゆたかにて

胸を纏へる光輝と

紫深き羽衣は

紺地の紙に金泥の

文字を透すが如くなり

冠に立てる二本の

羽は何物直にして

位を示す名鳥の

これ頂の飾なり

身はいと小さく尾は廣く

盛なるかな眞白なる

砂の面を歩み行く
君それ砂といふ勿れ
この鳥影を成す所
妙の光を眼にせずや
仰げば深し藤の棚
王者にかざす覆蓋の
形に通ふかしこさよ

四方に張りたる尾の羽の
めぐりはまとふ薄霞
もとより鳥屋のものなれど
鳥屋より廣く見ゆるかな
何事ぞこれ圓らかに
張れる尾羽より風出で

見よ漣の寄るごとく
羽と羽とを疾くぞ過ぐ
天つ錦の羽の戦ぎ
香りの草はふまずとも
香らざらめやその和毛
八百重の雲は飛ばずとも
響かざらめやその羽がひ

獅子よ空しき洞をいで
小暗き森の巖角に
その鬣をうち振ふ
猛き姿もなにかせむ
驚よ御空を高く飛び
日の行く道の縦横に
貫く羽を搏ち羽ぶく

雄々しき影もなにかせむ
誰か知るべき花蔭に
鳥の姿をながめ見て
朽ちず亡びず價ある
永久の光に入りぬとは
誰か知るべきころなく
庭逍遙の目に觸れて

孔雀の鳥屋の人の世に
高き示しを與ふとは
時は滅びよ日は逝けよ
形は消えよ世は失せよ
其處に残れるものありて
限りも知らず極みなく
輝き渡る様を見む

今われ假りにそのものを
美しとのみ名け得る

振放け見れば大空の
日は午に中たり南の
高き雲間に宿りけり
織りて隙なき藤浪の

影は幾重に匂へとも
紅燃ゆる天津日の
焔はあまり強くして
梭と飛び交ひ箭と亂れ
銀より白き穂を投げて
これや孔雀の尾の上に
盤渦卷きかへり迸り

或は露と溢れ零ち
或は霜とおき結び
彼處に此處に戯るゝ
千々の日影のたゞすまひ
深き浅きの差異さへ
色薄尾羽にあらはれて
涌來る彩の幽かにも

末は朧に見ゆれども
盡きぬ光の泉より
ひまなく灌ぐ金の波
と見るに近き池の水
あたりは常のまゝにして
風なき晝の藤の花
靜かに垂れて咲けるのみ

今夏いまなつの日の初はじめとて
菖蒲あやめ苳かり葺ふく頃ころなれば
力ちからあるかな物の榮はえ
若わかき緑みどりや樹まきは繁しげり
煙けぶりは深ふかし園そのの内うち
石いしも青葉あをばや萌もえ出いでん

栗しづくこぼるゝ苔こけの上うへ
栗しづくも堅かたき思おもひあり
思おもへば遠とほき冬ふゆの日ひに
かかの美うつくしき尾おしも凍こほる
寒さふき埒ねくらに起おき臥ふして
北風きたかぜ通かよふ鳥屋とやのひま
雙ふたつの翼つばさうちふるひ

もとよりこれや靈鳥の
さすがに羽は亂さねど
塵のうき世に捨てられて
形は薄く胸は瘦せ
命死ぬべく思ひしが
かくばかりなるさいなみに
鳥はいよく美しく

奇しき戦や冬は負け
春たちかへり夏來り
見よ人にして桂の葉
鳥は御空の日に向ひ
尾羽を擴げて立てるなり
讚に堪へたり光景の
庭の面にあらはれて

雲を驅け行く天の馬
翼の風の疾く強く
彼處蹄や觸れけんの
雨も溶き得ぬ深緑
澱未だ成らぬ新造酒の
流を見れば倒しまに
底ことくくあらはれて

天といふらし盃の
落すは淺黄瑠璃の河
地には若葉の神飾り
誰行くらしの車路ぞ
朝と夕との雙手もて
撃ぐる珠は陰光
溶けて去なんず春花に

くらべば強き夏花や
成れるや陣に驕慢の
汝孔雀よ華やかに
又かすかにも濃やかに
千々の千々なる色彩を
間なく時なく眩ゆくも
標はし示すたふとさよ

草は靡きぬ手を舉げて
木々は戦ぎぬ袖振りて
即ち物の證明なり
かへりて思ふいにしへの
人の生命の春の日に
三保の松原漁夫の
懸る見してふ天の衣

それにも似たる奇蹟かな
こひねがはくば少くも
此處も駿河とよばしめよ

斯くて孔雀は尾ををさめ
妻戀ふらしや雌をよびて
語らふごとく鳥屋の内

花耻かしく藤棚の
柱の陰に身をよせて
隠るゝ風情哀れなり
しばく藤は砂に落ち
ふむにわづらふ鳥と鳥
あな似つかしき雄の鳥の
羽にまつはる雌の孔雀

花賣

花賣娘名はお仙

十七花を賣りそめて

十八戀を知りそめて

顔もほてるや耻かしの

蝮に噛まれて脚切るは

山家の子等に驗あれど

戀の附子矢に傷かば

毒とげぬくも晩からん

村の外れの媼にきく

昔も今も花賣に

戀せぬものはなかりけり
花の壘はす業ならん

市に艶なる花賣が
若き脈搏つ花一枝
彌生小窓にあがなひて
戀の血汐を味はん

月光日光

月光の

語ららく
わが見しは一の姫
古あをき笛吹いて
夜も深く塔の

月光の

槽柅や白乳に
浴みして降りかゝる
花姿天人の
喜悦に地とよみ
虹たちぬ

日光の

わが見しは二の姫
香木の髓香る
語るらく

階級に白々と
立ちにけり

日光の

わが見しは二の姫

顔映る圓柱

驕り鳥尾を觸れて

風起り波怒る

霞立つ空殿を

語るらく

わが見しは一の姫

一葉舟湖にうけて

霧の下まよひては

髪かたちなやましく

亂れけり

七尺の裾曳いて
黄金の跡印けぬ

月光の

わが見しは一の姫
死の島の岩陰に
語るらく

青白くころび伏し
花もなくむくろのみ
冷えにけり

日光の

わが見しは二の姫
語るらく

城しろ近ちかく草くさふみて
妻つま覓まぐと來こし王み子こは
太た刀ち取とりの耻はぢ見みじと
火ひを散ちらす駿しゅん足そくに
かきのせて直ひた走ばせに
國こく領りやうを去さりし時とき
春はる風かぜは微そよ吹ふきぬ

華くわ燭しよく賦ふ

律り師しは麓ふもとの
駕かは山やまの上うへ
夕ゆふのいへ家いえの
竹たけのはやし林の

門かどにい入りぬ

親戚うか誰たれ彼かれ

宴えんをたすけ

小皿こざらの音おと

厨くりやにひゞき

燭しよくを呼よぶ聲こゑ

背戸せとに起おきる

小桶こづつの水みづに

浸ひたすは若菜わか

若菜わかを切きるに

俎板な馴なれず

新あたらしきは双ふたの

痕もなければ

菱形なせる

窓の外に

三尺の雪

戸を壓して

静かに暮るゝ

山の夕

夕は

樂しき時

夕は

清き時

夕は

美しき時うつくしきとき

この夕ゆふへ

雪ありゆき

この夕ゆふへ

月ありつき

この夕ゆふへ

宴ありうたげ

火の氣弱きをひのけよわきを

憂ひてうれひて

竈にのみかまどにのみ

立つなたつな

室に入りてむろにいらて

花はなの人ひとを見よ

花はなの人ひとと

よびまゐらせて

この夕ゆふへは

名なをいはず

この夕ゆふへは

名ななし

律師りし席せきに入いて

霜しも毫ごう威いあり

長ちやう人じんを煩わづらはすに

堪たへたり夕ゆふへ

琥珀こくはくの酒さけ

酌くむに盃さかづきあり

盃さかづきの色いろ

紅くれないなるを

山人やまびと驕おご奢ごりに

長ちやうずと言いふか

紅くれないは紅くれないの

芙蓉ふようの花はなの

秋あきの風かぜに

折なれたる其その日ひ

市いちの小こ路ちの

店みせに獲えたるを

律り師し詩しに堪た能のう

箱の蓋に

紅花盃と

書して去りぬ

紅花盃を

重ねて

雪夜の宴

月出でたり

月出でたるに

島臺の下暗き

島臺の下

暗き

蓬萊の

松の上まつの上に

斜なだにおとす

光ひかりなれば

銀ぎんの錫すい懸かけ

用意よういあらむや

山やまの竹たけより

笹ささを摘つみて

陶瓶たがらの口くちに

挿させしのみ

王者わうじゃの調度てうどに

似にぬは何なに々く

其子そのこの帯おびは

友禪染ゆうぜんぞめのうす紫むらさきの

唐縮緬たうぢりめんか

艶つやある髪かみを

結むすぶ時ときは

風かぜよく形かたちに

逆さからひ吹ふくと

怨えんずる恨うらみ

今いま無なし

若わかき木樵きせうの

眉まゆを見みれば

燭しよくを剪さる時とき

額白ぬかしろき人ひと陰かげをうけて

室むろにあり

袴はかまのうへに

手てをうちかさね

困こづずる席せきは

花はなのむしろ

筵じりの色いろを

評ひやうするには

まだ唇くちびるの

紅べにぞ深ふかき

北きたの家いへより

南の家みなみのいえに

來くる道みちすがら

得えたる思おもひは

花はなにあらず

蜜みつにあらず

花はなよりも

蜜みつよりも

美うつくしく甘あまき

思おもひは胸むねに溢あふれたり

雷いかづち落ちて

簀やぶを燒やきし時とき

諸もろ手に腕かひなを

許せし人は

今相對ひて

月を挾む

盃とるを

羞る二人は

天の上

若き星の

酒の泉の

前に臨みて

香へる浪に

恐づる風情

紅花盃

琥珀の酒

白き手より

荒き手にうけて

百の矢うくるも

去るな二人

御寺の塔の

扉に彫れる

神女の戯

笙を吹いて

舞ふにまされる

雪夜のうたげ

律師駕に命じて

北きたの家いへに行いき

月づか下かの氷ひょうじん人

去さりて後のち

二にん人いさゝか

容かたち儀を解ときぬ

夜よを賞しょうするに

律り師しの詩しあり

詩しは月げつ中ちゆうに

桂けい樹じゆ挂がり

千ぢやう丈えだ枝に

銀ぎんを着く

銀ぎん光くわう溢あふれて

家いへに入いらば

トする所

幸なりと

五月野

五月野の晝しみら
瑠璃轉の鳥なきて
草長き南國
極熱の日に火ゆる

謎と組む曲路

深沼の岸に盡き

人形の樹立見る

石の間青き水

水を截る圓肩に

睡蓮花を分け

のぼりくる美し君
柔かに眼を開けて

玉藻髮捌け落ち

眞素膚に翻へる浪

木々の道木々に倚り

多の草多にふむ

熟れ撓む石の上
みだれ伏す姫の髪
高圓の日に乾く
手枕の腕つき
白玉の夢を展べ
處女子の胸肉は

葉の裏に虹懸り
姫の路金撲つ
大地の人離野
變化居る白日時
垂鈴の百濟物

力ある足の弓

五月野の濡跡道

深沼の黒水

落星のかくれ所と

傳へきく人の子等

空像の數知らず

うかびくる岸の隈

湧き上ぼる高水に

いま起る物の音

めざめたる姫の面

丹穂なす火にもえて

たわわ髪身を起す
光宮玉の人

微笑みて下り行く
湖の底姫の國
足うらふむ水の梯
物の音遠ざかる

目路のはて岸木立
晝下ちず日の眞洞
迷野の道の奥
水姫を誰知らむ

花柑子

島國の花柑子

高圓に匂ふ夜や

大渦の荒潮も

羽をさめほゝゑめり

病める子よ和の今

窓に倚り常花の

星村にぬかあてゝ

さめぐゝとなけよかし

生をとめ月姫は

新なる丹の皿に

開命貴寶を盛り
よろこびの子にたびん

清らなる身とかはり
五月野の遠を行く
花環虹めぐり
銀の雨そとく

不開の間

花吹雪
まぎれに
さそはれて
いでたまふ
館の姫

香の物
焚きさし
探火女めく
影動き
きえにけり
夢の華

蝕める
古梯
眼の前
櫓だつ
不開の間

處女の
胸にさき
きざはしを
のぼるか
諸扉
さと開く

風のごと
くらやみに
誰ぞあるや
色蒼く
まみあけ
衣冠して

東帯とくたいの
人立ひとたててり

思おもふ今いま

いけにへ

百もも年としを

人ひと柱ばしら

えも朽くちず

年とし若わかき

つはもの

戀こひ人びとを

持もち乍なら

うめられぬ

禁制いんせい 姫ひめの裾すそ
なほ見みえぬ
扉とびらとづ
居ゐる 白壁しろが壁に
蟲むし

怪けし 瞳ひとみ
炎ほのほに
身みは燃もえて
死しにながら
輝かがやける
何なにしらん

春はるの日は
うつろなす
暮くれにけり

安あ乗のりの稚ち兒こ

志し摩まの果は安あ乗のりの小こ村むら
早はや手て風かぜ岩いはをどよもし
柳やなぎ道みち木き々々を根ねこじて
虚み空そら飛とぶ断ちぎれの細ほそ葉は

水底の泥を逆上げ
 かきにごす海の病
 そり立つ波の大鋸
 過げとこそ船をまつらめ
 とある家に飯蒸かへり
 男もあらず女も出で行きて

稚子ひとり小籠に座り
 ほゝるみて海に對へり

荒壁の小家一村
 反響する心と心
 稚子ひとり恐怖をしらず
 ほゝるみて海に對へり

いみじくも貴き景色
今もなほ胸にぞ跳る
少くして人と行きたる
志摩のはて安乗の小村

鬼の語

顔蒼白き若者に
秘める不思議きかばやと
村人数多來れども
彼はさびしく笑ふのみ

前の日村を立出で、
仙者が嶽に登りしが
恐怖を抱くものゝごと
山の景色を語らはず
傳へ聞くらく此河の
きはまる所瀧ありて

其れより奥に入るものは
必ず山の崇あり

蝦蟆氣を吹いて立曇る
篠竹原を分け行けば
冷えし掌あらはれて
頂に顔に觸るゝとぞ

陽炎高さ二萬尺

黄山赤山黒山の

劍を植ゑたる頂に

秘密の主は宿るなり

盆の一日は暮れはて

淋しき雨と成りにけり

怪しく光りし若者の
眼の色は冴え行きぬ

劉邦未だ若うして

谷路の底に蛇を斬りつ

而うして彼れ漢王の

位をつひに贏ち獲たり

この子も非凡山の氣に
中たりて床に隠れども
禁を守りて愚鈍者に
鬼の語を語らはず

戯れに

わが居る家の大地に
黒き帝の住みたまひ
地震の踊の優なれば
下り來れと勅あれど
われは行きえず人なれば

わが居る家の大空に
白き女王の住みたまひ
星の祭の艶なれば
上り來れと勅あれど
われは行きえず人なれば

わが居る家の古厨子に
遠き御祖の住みたまひ
とこ降る花のたへなれば
開けて來れとのたまへど
われは行きえず人なれば
わが居る家の厨内

働はたらく妻つまをよびとめて
夕ゆふの設まけをたづぬるに
好このめる魚うをのありければ
われは行ゆきけり人ひとなれば

初陣うひ ぢん

父ちちよ其その手た綱づなを放はなせ
槍やりの穂ほに夕ゆふ日ひ宿やどれり
數かずふればいま秋あき九月くわつ
赤せき帝ていの力ちから衰おとろへ
天てん高たかく雲くも野のに似にたり

初陣の駒鞭うたば
夢杳か兜の星も
きらめきて東道せむ

父よ其手綱を放せ
狐啼く森の彼方に
月細くかゝれる時に

一すじの烽火あがらば
勝軍笛ふきならせ
軍神わが肩のうへ
銀燭の輝く下に
盃を洗ひて待ちね
父よ其手綱を放せ

髪かみ 皤しろ くきみ老おいませり
花はな 若わか く我わが胸むね 踴おどる
橋はし を断たちて砲つおしならべ
巖いは 高たか く劍つるぎ を植うゑて
さか落おとし千丈ぢやうの崖がけ
旗はた さし物もの 亂みだれて入いらば
大雷たいらい 雨う 奈落ならくの底そこ

風寒かぜ しあゝ皆血みなち 沙しほ

父ちち よ其手綱そのたづな を放はなせ
君きみ ちばしうたゝ寝ねのまに
繪卷ゑまき 物逆ものさやくに開ひらきて
夕ゆふ べ星波ほしなみ 間に沈しづみ
霧きり 深ふか く河かはの瀬せなりて

野の草に亂る、螢
石の上悪氣上りて
亡跡を君にあらせん

父よ其手綱を放せ
故郷の寺の御庭に
うるはしく列ぶおくつき

栗の木こそよげる夜半に
たゞ一人さまよひ入りて
母上よ晩くなりぬと
わが額をみ胸にあて、
ひたなきになきあかしなば
わが望満ち足らひなん
神の手に抱かれずとも

父よ其手綱を放せ
雲うすく秋風吹きて
萩芒高なみ動き
軍人小松のかげに
遠祖らの功名をゆめむ
今ぞ時貝が音ひゞく

初陣の駒むちうちて
西の方廣野を驅らん

駿馬問答

使者

月毛なり連錢なり

丈三寸年五歲

天上二十八宿の連錢

須彌三十二相の月毛

青龍の前脚

白虎の後脚

忠を踏むか義を踏むか

諸蹄の薄墨色

落花の雪か飛雪の花か

生つきの眞白栲

竹を剥ぎて天を指す兩の耳のそよぎ
鈴を懸けて地向ふ雙の目のうるほひ
舉れる筋怒れる肉
銀河を倒にして膝に及ぶ鬣
白雲を束ねて草を曳く尾
龍蹄の形驊騮の相
神馬か天馬か

言語道斷希代なり
城主の御親書
献上違背候ふまじ

駿馬の主

曲事仰せ候

城主の執心物に相應はず
夫れ駿馬の來るは
聖代第一の嘉瑞なり
虞舜の世に鳳凰下り
孔子の時に麒麟出るに同じ
理世安民の治略至らず
富國殖産の要術なくして

名馬の所望及び候はず

使者

御馬の具は何々
水干鞍の金覆輪
梅と櫻の螺鈿は

御庭の春の景色なり

鞆の縫物は

飛鳥の孔雀七寶の縁飾

雲龍の大履脊

紗の鞍褙

さて蘇芳染の手綱とは

人車記の故實に出で

鐵地の鏡は

一葉の船を形容たり

鞆鞆は

大總小總掛け交せて

五色の絲の縷絲に

漣組たる連着懸

差繩行繩引繩の

緑に映ゆる唐錦
菱形轡蹄の鐵
馬装束の數々を
盡して召されうづるにても
御錠違背候ふか

駿馬の主

中々の事に候
駿馬の威徳は金銀を忌み候

使者

さらば駿馬の威徳

御物語候へ

駿馬の主

夫れ駿馬の威徳といつば
世の常の口強足駿
笠懸流鏑馬犬追物

遊戯狂言の凡畜にあらず
天竺震旦古例あり
馬は觀音の部衆
雜阿含經にも四種の馬を説かれ
六波羅密の功德にて
畜類ながらも菩薩の行
悉陀太子金色の龍蹄に

十丈の鐵門を越え
三界の獨尊と仰がれ給ふ
帝堯の白馬
穆王の八駿
明天子の徳至れり
漢の光武は一日に
千里の馬を得

寧王朝夕馬を畫て
桃花馬を逸せり
異國の譚は多かれども
類稀なる我宿の
一の駿馬の形相は
嘶く聲落日を
中天に回らし

蹄ひづめの音おと星せい辰しんの
夜よる碎くだくる響ひびきあり
躍おどれば長ちやう髪はつ風かぜに鳴なつて
萬ぢやう丈たにの谷を越こえ
馳はすれば鐵てつ脚きやく火ひを發はつして
千ち里りの道みちに疲つかれず
千せん斤しんの鎧よろひ百ひゃく貫くわんの鞍くら

堅かた轡ぐつ強つよ鞭むち
鎧よろひかろく
鞍くらゆるく
轡ぐつは嚙かみ碎くだかれ
鞭むちはうちをれ
飽あくまで肉しの硬かたき上うへに
身み輕かろの曲ま馬ば品しな々くの藝わざ

碁盤立弓杖

一文字杭渡り

教へずして自ら法を得たり

扱又絶險難所渡海登山

陸を行けば平地を歩むが如く

海に入れば扁舟に棹さすに似たり

木曾の御嶽駒ヶ嶽

越の白山立山

上宮太子天馬に騎して

梵天宮に至り給ひし富士の峯

高き峯々嶽々

阿波の鳴門穩戸の瀬戸

天龍刀根湖水の渡り

聞ゆる急流荒波も

蹄ひづめにかけてかつしく
肝臆かんおちずかげはやし
いつかなか馳かけりこ越こえつべし
そのほかせん戦ぢやう場の砌みきりは
風かぜのおと音に伏ふせ勢せいをさ覺とり
雲くもをみてう雨せつ雪をわきまふ
先陣せんぢん先さき駈がけ拔ひ駈がけ間し牒び

又またはかつせん合ちゆう戦ちゆう最なか中の時とき
槍やり矛ぼこ箭や種たねヶしま島
面めんをふりた躰たいをかはして
主しゆをかばちゆう忠ととゆう勇は
家い子の郎らう等どうにこ異ことならず
かゝるめい名ば馬ははおく奥の牧まき
吾あつ妻まのまき牧だい大せん山き木ぞ曾
吾妻あつまのまき牧だい大せん山き木ぞ曾

甲斐の黒駒
その外諸國の牧々に
萬頭の馬は候ふとも
又出づべくも候はず
名馬の鑑駿馬の威徳
あゝら有難の我身や候

使者

御物語奇特に候
とうく城に立歸り
再度の御親書
申し請はゞやと存じ候

駿馬の主

かしまじき御使者候
及びもなき御所望候へば
いか程の手立を盡され
いくばくの御書を遊ばされ候ふとも
御料には召されまじ

法螺鉦陣太鼓
旗さし物笠符
軍兵數多催されて
家のめぐり十重二十重
関の聲あげてかこみ候ふとも
召料には出さじ
器量ある大將軍にあひ奉らば

其時こそ駒も榮あれ駒主も
道々引くや四季繩の
春は御空の雲雀毛
夏は垣ほの卯花鶉毛
秋は落葉の栗毛
冬は折れ伏す蘆毛積る雪毛
數多き御馬のうちにも

言上いたして召され候はん
拜謁申して駿馬を奉らん

この篇『飾馬考』『驛縮全書』『武器考證』『馬術全書』『鞍鏡
之辯』『春日神馬繪圖及解』『太平記』及び巢林子の諸作
に憑る所多し敢て出所を明にす



をはり

日を享けし旗雲の彼方、鐵漿墜せしは、篠、日間賀、佐久の島、師崎はかすけく、立馬岬はほのかに、神風を吹く勢の國は、淡路一抔、遠く大わたつみの外に立ち籠めたり。江比間とやらむ、路、丘腹に通ず、下は海、碧瀾層を追ひて群松の根を洗ふ、松嶺濤聲、心意甚だ寧らかなり。すそにして丘阜の間に入り、雲時してまた海邊に出づ、一匝の碧色、波風きて水に音なし、白砂前に奔り亂松後に繞る。沖に鷗がける帆の、三つ四つ二つ、一段の興趣を添ふ。〔影〕照潮記、伊良湖の一節



世評

●二六新報

細川花紅氏千金の家に生れて文を能し兼て寫眞の技に巧なり。「影」は其文章と撮影とを集めたるもの。常磐撮影行と中禪寺の三日は尋常紀行文と選を異にし、談

●萬朝報

細川花紅といふ寫眞好文學好の銀座で有名な紙屋の若旦那の道楽に拵へた紀行集、巻尾に山岸荷葉の短篇小説を挿さむ。その装釘紙質の見事なる、紅葉山人の道楽も是に及ぶべくはな。表紙は

錢 さい 儀 の ぼ かめ 早 な に 和 ま



を
は
り

●細川花紅逸人誕生第二十三週年紀念著●

小品

紀行



表紙繪 中澤弘光君

水族 (綾羽二重木版極彩色五遍刷)

見返し畫 中澤弘光君

海底 (奉書木版彩色三度刷)

口繪 梶田半古君

湖浴 (奉書木版精巧十七遍刷)

挿畫 中澤弘光君

白菊の精 (奉書木版極彩色十五遍刷)

真夜 (鳥の子紙木版色刷)

落英 (鳥の子紙木版色刷)

流水墅書院發行

茂志保艸

特製金壹圓五拾錢
上製金六拾八錢

郵送費金八錢

京を去る文
旅 白菊を懐かしむ辭

紫陽花の硯
淨地の硯

多摩川を咀ふ記
續せせらぎ日記

落花生の硯
盆玩の硯

錢 銀 ぼ め 平 な 和 ま

目 次

●細川花紅逸人誕生第二十三週年紀念著●

流水聖書院發行

小品 紀行



茂志保艸

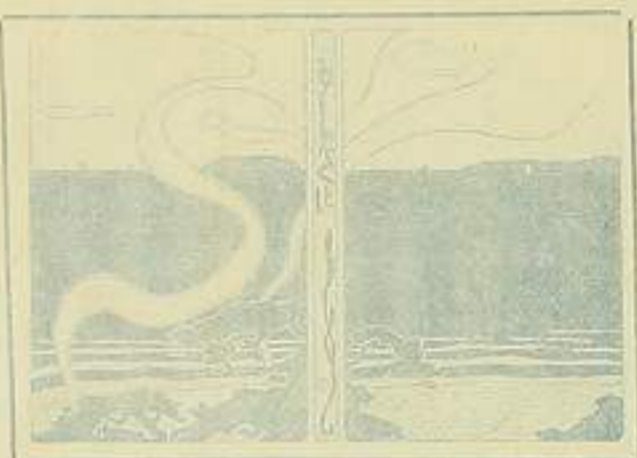
錢八金銀送郵

特製金邊圓五拾錢
上製金六拾八錢

目次

表紙繪	中澤弘光君	京を去る文
水 族	(綾羽三重木版彩色五通刷)	白菊を懐かしむ
見返し畫	中澤弘光君	旅
海 底	(奉書木版彩色三度刷)	紫陽
口 繪	梶田半古君	野 地
潮 浴	(奉書木版精巧十七通刷)	多摩川を咀ふ
插 畫	中澤弘光君	續せせらぎ日記
白菊の精	(奉書木版彩色十五通刷)	行 落
真 夜	(鳥の子紙木版色刷)	行 盆
落 英	(鳥の子紙木版色刷)	行 自
熱 烈	(鳥の子紙木版色刷)	行 然
附 錄	島崎藤村君	行 具
小 品	椰子の葉蔭	行 春
		行 花
		行 視
		行 文

夕陽は沈みぬ、新月の影、圓盤の空にまやけく、富士はますく、
照りわたりにて、湖水晶の海として夜目にもひかり輝くがごとし。
翫みておもふ、われは富士の龍兒にあらずやと。あゝ、倨傲の
「人」、酷薄の「世」、壓抑や、阻攔や、我虐や、日夜心神を震ま
して、この飄零の羈縻を責め、埋骨の地いま將たわがために寸
土を割らずして、愁風徒らに萬恨を寄せぬるきのふけふ、憐れ
るものは寧められ、苦めるものは慰められたり。恵みある靈山
や、こゝに詩神の榮を得たるわれは幸あるかな。
Mountain is the throne of Truth.
富士を讀して何とほなく袖を濡し候。(茂志保艸「京を去る文
の一節」)



世 評

●國民新聞

内容は必しも多岐多からざれど精選を
りて、巻頭、京を去る文を讀んで、眉山
の「山」(日記)を思ひ出され、次では「白
菊の精」(鳥の子紙木版彩色十五通刷)著
者の中澤弘光君の才を示すものがある
べき、實に華々しくして宛も光潤に大
に富む、用紙の質に加ふるに印刷の良
り、更に挿畫の精巧を以てして、我が
歌文學界には容易に見得べからざる體裁
な有す。

●大阪毎日新聞

氏の如き作家が自らその資を出し
て、出版界に貢献する所あるは喜ぶべし、

●發兌元

東京三丁橋區
銀座三丁目

左久良書房

(電話新橋 三百四十番)

●都新聞

此の「茂志保艸」の如きは、未だ余の手に
爲た事はないと言つても可い程で、先づ
羽二重の表紙に一瞥を喚し、梶田半古君
及び中澤弘光君が其の才筆を揮つた挿畫
の印刷、用紙の美々しさに二驚を喚し、
其の本文を讀くに及んで、著者が文致の
精練なるに、余は實に三驚を喚したので
あつた。

●文藝俱樂部

世に傳りに傳つた美本を澤山に見たが、
此の「茂志保艸」の如きは、未だ余の手に
爲た事はないと言つても可い程で、先づ
羽二重の表紙に一瞥を喚し、梶田半古君
及び中澤弘光君が其の才筆を揮つた挿畫
の印刷、用紙の美々しさに二驚を喚し、
其の本文を讀くに及んで、著者が文致の
精練なるに、余は實に三驚を喚したので
あつた。

●細川花紅逸人誕生第二十三週年紀念著●

流水野書院發行

茂志保艸

錢八金費送郵



紀行 小品

特製金壹圓五拾錢
上製金六拾八錢

表紙繪 中澤弘光君

水族 (綾羽二重木版極彩色五遍刷)

見返し畫 中澤弘光君

海底 (奉書木版彩色三度刷)

口繪 梶田半古君

湖浴 (奉書木版精巧十七遍刷)

挿畫 中澤弘光君

白菊の精 (奉書木版極彩色十五遍刷)

良夜 (鳥の子紙木版色刷)

落英 (鳥の子紙木版色刷)

熱烈 (鳥の子紙木版色刷)

附錄 島崎藤村君
小品 椰子の葉蔭

京を去る文

旅 白菊を懐かしむ辭

紫陽花の野

淨地の人

多摩川を阻ふ記

續せせらぎ日記

落花行

盆玩

自熱

遊結

娣紀

行鮮烈然景具春花

次 目

夕陽は沈みぬ、新月の影、圓盤の空にさやけく、富士はますます
照りわたりにて、紫水晶の燦として夜目にもひかり輝くがごとし。
蕭みてたもふ、われは富士の寵兒にあらずやと。あゝ、倨傲の
「人」、酷薄の「世」、壓抑や、陥穽や、戕虐や、日夜心神を惱ま
して、この飄零の羸軀を責め、埋骨の地いま將たわがために寸
土を割つたして、愁風徒らに萬恨を寄せぬるものふけふ、憎め
るものは寧められ、苦めるものは慰められたり。恵みある靈山
や、こゝに詩神の榮を得たるわれは幸あるかな。
Mountain is the throne of Truth!
富士を讀して何となく袖を濡し候。(『茂志保艸』京を去る文
の一節)



世 評

●都新聞

○此の文章はや、情趣を缺く所あるが如き
○も、その研麗の筆致は優に一家をなすべ
○く、最終の紀行文(送姉紀行)の如き濃
○艶を極めたり

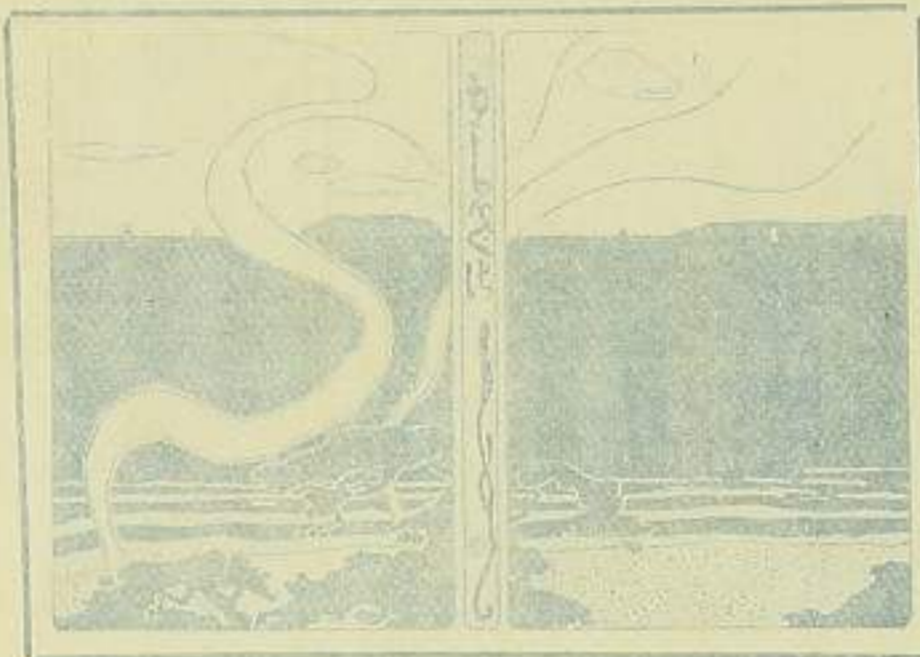
○疊に「影」へうぶ聲を世に公にして、出版
○界に美的釘装の標本を示したる細川花紅
○氏は、いま其の第二十三回の誕辰を紀念
○する爲に、自己の作品數篇を蒐めたる、
○『茂志保艸』を其の知友に頒ち贈れり。絹
○表紙には精巧の極彩色模様が現はし、挿
○畫の木彫彩色版、表紙の裏の見返し、紙

目次

海 底 (奉書木版彩色三度刷)	桐田半古君
潮 浴 (奉書木版精巧十七遍刷)	中澤弘光君
白菊の精 (奉書木版極彩色十五遍刷)	
良 夜 (鳥の子紙木版色刷)	
落 英 (鳥の子紙木版色刷)	
熱 烈 (鳥の子紙木版色刷)	
附 録	島崎藤村君
小 品	椰子の葉蔭

多摩川を阻ふ日記	野地
續せせらぎ日記	野地
落花行	熱自盆玩
行 紀	熱自盆玩
鮮烈然景具春花	熱自盆玩

夕陽は沈みぬ、新月の影、圓盤の空にさやけく、富士はまですく照りわたたりて、紫水晶の燦として夜目にもひかり輝くがごとし。蕭々たるもふ、われは富士の寵兒にあらずやと。あゝ、倨傲の「人」、酷薄の「世」、壓抑や、陥擠や、戕虐や、日夜心神を惱まして、この飄零の羸軀を責め、埋骨の地いま將たわがために寸土を割つたして、愁風徒らに萬恨を寄せぬるものふけふ、慚めるものは寧められ、苦めるものは慰められたり。恵みある靈山や、こゝに詩神の榮を得たるわれは幸あるかな。
Mountain is the throne of Truth!
富士を讀して何となく袖を濡し候。(『茂志保州』京を去る文の一節)



世評

●國民新聞

内容は必しも其數多からざれど精選せり。巻頭の「京を去る文」を讀んで、眉山の(ふさ、こつ日記)を思出せり。次では(白菊を懐かしむ辭、旅観等、何れも是れ著者の華の如き文才を示さるものかあるべき、實に華々しくして宛も花園に入りたらんが如し、況や其製本の美且つ意匠に富む、用紙の良に加ふるに印刷の良あり、更らに挿畫の精巧を以てして、我が軟文學界には容易に見得べからざる體裁を有す。

●大阪毎日新聞

氏の如き資産家が自からその資を出して、出版界に貢獻する所あるは喜ぶべし、

發兌元

東京橋區
銀座三丁目

左久良書房

(電話新橋 三百四十番)

●都新聞

畫に影、うぶ聲を世に公にして、出版界に美的釘裝の標本を示したる細川花紅氏は、いま其の第二十三回の誕辰を紀念する爲に、自己の作品數篇を蒐めたる、『茂志保州』を其の知友に頒ち贈れり。絹表紙には精好の極彩色模様を現はし、挿畫の木彫彩色版、表紙の裏の見返し、紙質の精良なる、印刷の鮮明なる、綴りに用ひし革紐など、何れも凝りに凝りしものなり、本年の出版物に是れほどの美本は曾て見ず、收むるさころの小品、文字清新、筆を落して爽氣紙に満てり。

●文藝俱樂部

世に凝りに凝つた美本も澤山に見たが、此の『茂志保州』の如きは、未だ余の手に爲た事はないと言つても可い程で、先づ羽二重の表紙に一驚を喫し、桐田半古君及び中澤弘光君が其の才筆を揮つた挿畫の印刷、用紙の美々しさに二驚を喫し、其の本文を繙くに及んで、著者が文致の精練なるに、余は實に三驚を喫したのであつた。



は地質地文に及びて觀察清新、照潮記、夕が日記、うつし系日記、文姿清健皆絶品たるを失はず。附録山岸荷葉氏の鳥影は清麗無雙なり。殊に寫眞版の精巧なる、表装金色の崇麗なる、さては意匠の新しき、紙質の美しくしき、現時出版界容易に見る能はざるの逸品、花紅氏が文藝に貢献の勞多とせざるを得ず。

クロース金箔摺へ影の一字に櫻の若葉蔭を摺り込み、表裏の見返し三頁は清方の海邊の松が海上に倒影する三度摺の彩色畫、口繪は清忠の關兵衛、奉書刷のそれは見事なもので星の影を利かせ、挿める寫眞に日、月、春、花、心の五影とゆく春の一葉は印畫として驚くべき値をもつて居る、その外にも景色畫が數葉あつて、本文の紀行文と共に、若旦那氣質を絶した執れも見事なものである。

發兌元 東京京橋區
銀座三丁目 **左久良書房**
(電話新橋 三百四十番)

序文 後藤宙外君
附會 一条茂美君

口畫 山中古洞君
附錄 中村春雨君
東京朝日新聞



●大阪朝日新聞
花紅子畫に「影」といふ冊子を物して、美麗なる寫眞、清洒なる文章をうつし今又「うぶ聲」をあらはす。影と聲と、以て花紅子を捕ふべし。是れ渠の二十二回

細川花紅氏の著にして、カナリヤの戀、樂の力、車丁、深山の湖水、磯馴衣等を集めて一篇とし、以て氏が誕辰の紀念として出版せるものたり。氏の文風に一家の調を爲し、又同情の深厚なる點、特に喜ぶべし。釘装は例に依つて申分なく、挿畫表紙畫等又遺憾なし。

東京市京橋區銀座三丁目 **左久良書房**
(電話新橋三百四十番)
東京市神田區表神保町 **東京堂書店**
(電話本局二百四十八番)



世評

●二六新報

細川花紅氏千金の家に生れて文を能し兼て寫眞の技に巧なり。「影」は其文章と撮影とを集めたるもの。常盤撮影行と中禪寺の三日は尋常紀行文と選を異にし、談は地質地文に及びて觀察清新、照潮記、夕がほ日記、うつしる日記、文姿清健者絶品たるを失はず。附録山岸荷葉氏の鳥影は清麗無塵なり。殊に寫眞版の精巧なる、表装金色の崇麗なる、さては意匠の新しき、紙質の美しくしき、現時出版界容易に見る能はざるの逸品、花紅氏が文藝に貢獻の勞多とせざるを得ず。

●萬朝報

細川花紅といふ寫眞好文學好の銀座で有名な紙屋の若旦那の道樂に拵へた紀行集、巻尾に山岸荷葉の短篇小説を挿す。その装釘紙質の見事なる、紅葉山人の道樂も是には及ぶべくはない。表紙はクローズ金箔摺へ影の一字に櫻の若葉蔭を摺り込み、表裏の見返し三頁は清方の海邊の松が海上に倒影する三度摺の彩色畫、口繪は清忠の關兵衛、奉書刷のそれはく見事なもので星の影を利かせ、挿める寫眞に日、月、春、花、心の五影とゆく春の一葉は印畫として驚くべき値をもつて居る、その外にも景色畫が數葉あつて、本文の紀行文と共に、若旦那氣質を絶した孰れも見事なものである。

發兌元 東京橋區 左久良書房
銀座三丁目
(電話新橋 三百四十番)

序文 後藤宙外君 口畫 山中古洞君
挿繪 一條成美君 附録 中村春雨君
●細川花紅逸人誕生第二十二週年紀念著●



うぶ 聲

大日本竹馬會發行

郵送費金四錢

次 目

表紙畫 藁の上 (アイボリー紙木版五遍刷)
口 繪 鳳雛兒 (奉書木版十五遍刷)
挿 畫 うぶ聲、眞綿、フランボ、宮參、鳥の子(ケント紙木版各色刷)
せせらぎ日記カナリヤの戀、樂の力、車丁 深山の湖水、磯馴衣
門出、白蓮紅蓮、船路、城が島、追懷、靈祭、落日、良夜、牽牛花、白旗紅旗
●附録 小誕生日 說

されど、それは瞬間の迷想のみ、慰藉なくして霎時も安居し難きわれ、あつても慰藉を到所に求めて到所に得ざるわれの、いかにして彼のごとく平和を得べきか。轆轤の半世、淪落の微軀、骨をこの山に曝さむとするに、妄念なほ火よりも熾なり、水のながれ、雲のたすまひ、白露隕つる夕や、細雨粘する朝や、そこに惱みなきか、そこに煩ひなきか、秋開けて萬山黄なるとき、冬深うして四境白きとき、そこに苦みなきか、そこに痛みなきか、飛花しづ心なく散り、落葉亂れて舞へるのをり、われはなほここに安逸の地を得べきか。いなと心のうちに叫びしわれは、堪へ難き悶えを

錢 四 送 郵 費 金 四 錢

題字 尾崎紅葉君
 表紙 鏑木清方君
 寫眞 日本寫友會員
 (寫眞)文學記者 細川花紅逸人著
 序文 巖谷小波君
 口繪 鳥居清忠君
 附録 山岸荷葉君

寫眞

文集



影

日本寫友會發行

郵送費金八錢

製本費金九拾八錢

次 目

表紙 繪 (金クロス金版刷)	見返し 畫 (舶來紙石版三度刷)	口 繪 (奉書木版極彩色十五遍刷)	寫眞意匠畫 (コロタイプ)	寫眞風景畫 (オウタタイプ)	寫眞俳畫 (コロタイプ)
青葉 隆	松原の影	星の影	日月春花心の影	入巨秋山人の影	入巨秋山人の影
照潮記	伊長御前日記	夕がほ日	あるがた	常磐撮影日記	雪紀空の影
岩谷小波君	鳥居清忠君	山岸荷葉君	船嘯空來下	船嘯空來下	探禪寺の三日

空よく霽れたり、上は小松の褐色染、下は青海波の裾襖様、鏡とまがふ渥美の入江に、うつりもやせむ霧の、紫立てるは三の山の、青う流るゝは尾の峰か、日露脂の紅、解けて濡ふと見えし、日を享けし旗雲の彼方、鐵鑿壁せしは、篠、日間賀、佐久の島島、師崎はかすけく、立馬岬はほのかに、神風ぞ吹く勢の國は、淡霧一抹、遠く大わたつみの外に立ち籠めたり。江比間とやらむ、路、丘腹に通ず、下は海、碧瀾層を追ひて群松の根を洗ふ、松籟濤聲、心意甚だ寧ろかなり。すこにして丘阜の間に入り、雲時してまた海邊に出づ、一匣の碧色、波風そて水に音なし、白砂前に奔り亂松後に繞る。沖に鳴かせる帆の、三つ四つ二つ、一段の興趣を添ふ。(『影』照潮記、伊長湖の一節)



世 評

●二六新報

細川花紅氏千金の家に生れて文を能し兼て寫眞の技に巧なり。「影」は其文章と撮影とを集めたるもの。常磐撮影行と中禪寺の三日は尋常紀行文と選を異にし、談

●萬朝報

細川花紅といふ寫眞好文學好の銀座で有名な紙屋の若旦那の道楽に拵へた紀行集、巻尾に山岸荷葉の短篇小説を挿さむ。その装釘紙質の見事なる、紅葉山人

序文 後藤宙外君
 挿繪 一條成美君
 口畫 山中古洞君
 附録 中村春雨君
 ●細川花紅逸人誕生第二十二週年紀念著●

小品

紀行



うぶ聲

大日本竹馬會發行

製本費金參拾九錢

郵送費金四錢

次 目

- 表紙畫 藁の上 (アイボリ紙木版五遍刷)
- 口 繪 鳳雛兒 (奉書木版十五遍刷)
- 挿 畫 うぶ聲、眞綿、フランボ、宮參、鳥の子(ケント紙木版各色刷)
- せせらぎ日記 カナリヤの戀、樂の力、車丁、深山の湖水、磯馴衣
- 門出、白蓮紅蓮、船路、城が島、追懷、靈祭、落日、良夜、牽牛花、白旗紅旗
- 附録 小誕生日

されど、それは瞬間の迷想のみ、慰藉なくして霎時も安居し難きわれ、あつても慰藉を到所に求めて到所に得ざるわれの、いかにして彼のこどく平和を得べきか。轆轤の半世、淪落の微軀、骨をこの山に曝さむとするに、妄念なほ火よりも熾なり、水のながれ、雲のたすまひ、白露隕つる夕や、細雨粘する朝や、そこに憫みなきか、そこに煩ひなきか、秋開けて萬山黄なるとき、冬深うして四境白きとき、そこに苦みなきか、そこに痛みなきか、飛花しつ心なく散り、落葉亂れて舞へるのをり、われはなほこゝに安意の地を得べきか。いなと心のうちに叫びしわれは、堪へ難き悶えを感じぬ。(「うぶ聲」深山の湖水の一節)



世 評

誕辰の紀念なりと。その得意察するに足る。渠は千金の家に生れ、而も同情及び趣味に富み、樂むと共に能く泣く、泣くだけそれだけ樂しきならん。ハイカラの「影」に照らして、ハイカラの「うぶ聲」を聴けば首肯するべし。

●東京日日新聞

細川花紅氏の著にして、カナリヤの戀、樂の力、車丁、深山の湖水、磯馴衣等を集めて一篇とし、以て氏が誕辰の紀念として出版せるものたり。氏の文風に一家の調を爲し、又同情の深厚なる點、特に喜ぶべし。釘装は例に依つて申分なく、挿畫表紙畫等又遺憾なし。

●大阪朝日新聞

花紅子眞に「影」といふ冊子を物して、美麗なる寫眞、清洒なる文章をうつし今又「うぶ聲」をあらはす。影と聲と、以て花紅子を捕ふべし。是れ渠の二十二回

東京市京橋區銀座三丁目

左久良書房

(電話新橋三百四十番)

東京市神田區表神保町

東京堂書店

(電話本局二百四十八番)

錢 四 錢 郵 送 費 金 四 錢

左久良書房新刊圖書

國木田獨步君著
小杉未醒君畫
滿谷國四郎君畫

小説
運命

製本費金七拾五錢 郵送費金六錢

● 要目 ● 運命論者 ● 巡查 ● 酒中
日記 ● 馬上の友 ● 悪魔 ● 畫の悲
み ● 空知川の岸邊 ● 非凡なる凡人 ● 日の出

『獨歩集』以外の傑作を網羅せり

馬場孤蝶君選
齋藤松洲君畫

詩集
春駒

製本費金參拾五錢 郵送費金四錢

現に睡る野を焼けば、胸の春駒戀を得て、わかき
血汐に狂ふこと、燃えて驕れるかげろふや。白き蠶
ふりみだし、西に勢へる駿足の、みるみる丘をのぼ
りては、凱歌あぐる焔かな。あらおもしろのながめ
ふと、はらばひて吹く牧の子が、すさびの笛は草な
れば、おのづからなる野の調。ほのほは高く天に和
ぎ、笛の音清く地に流れ、情想融くなる春風の、ま
た夢に入る紫野。



書圖刊新房書良久左

明治三十九年度

太平洋會カタログ

製本費金壹圓 郵送費金四錢

明治三十九年度

繪葉書 太平洋會 參考堂

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

明治卅九年 春季太平洋 畫會展覽會 紀念繪葉書

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

寫眞文學記者 沙上寫隱新著

寫眞 小詩材 小影

製本費金貳拾八錢 郵送費金四錢

畫帖につゝ初戀を、君よ答むな胸に咲き、胸に散りにし小さき花、その懐かしみ誰か知る。夜、手枕のひとり寐に、有情の夢のかたりひや、曉、覺めてながめ入る、影は無心の笑まひかな。指儂ふる二十年の、名残の色は艶なりき、今は昔の匂ひさへ、黄脂日にますうらぶれや。さはれほのめくなまめきの、眼ざしに盡きぬ生命あれ、巻の寫繪がずかずを、瓦とすて、玉と止めむ。

書圖刊既房書良久左

齋藤 弔花 君 小品 心扉 錄 (再版)

製本費 金參拾五錢 郵送費 金四錢

馬場孤蝶君選著 詩集 花がたみ (三版)

製本費 金參拾四錢 郵送費 金四錢

書圖刊近房書良久左

岡鬼太郎君著 說小畫 夜帶 製本費 金四拾八錢 郵送費 金四錢

戶川秋骨君著 譯文西詞餘情 製本費 未 郵送費 未 定

岩野泡鳴君著 論神秘的半獸主義 製本費 未 郵送費 未 定

河井醉茗君選 詩集桂の卷 製本費 未 郵送費 未 定

小杉未醒君著 畫集漫畫一年 製本費 未 郵送費 未 定

製本費 金十七錢
郵送費 金六錢

明治三十三年五月一日印刷
明治三十三年五月五日發行

編輯者 東京府荏原郡品川町利田新地六番地 戶田直秀

發行所 東京市京橋區銀座三丁目 左久良書房 (電話新橋三四〇番)

印刷所 東京市京橋區築地三丁目十五番地 帝國印刷株式會社
印刷者 東京市京橋區南小田原二丁目九番地 中野鐵太郎



特約大取次所

(次第不同いろは順)

東京市日本橋區墨田
 東京市京橋區尾張町二丁目
 東京市神田區表神保町
 東京市京橋區龜屋町
 東京市神田區裏神保町
 東京市京橋區中橋廣小路
 東京市日本橋區大傳馬町三丁目
 東京市神田區表神保町
 東京市日本橋區住吉町
 大阪市東區備後町四丁目
 大阪市東區博勢町四丁目
 名古屋市本町三丁目
 熊本市新三丁目

東北 隆海堂
 東京 明京堂
 上野 田明堂
 前見 文文堂
 淺學 誠學堂
 修誠 誠學堂
 至誠 誠學堂
 寶文 誠學堂
 中瀨 文誠堂
 川瀨 文誠堂
 長崎 文誠堂



